

BO DIDDLEY ●ボ・ディドリー

Photo: Kazumi Okuma Interpretation: Kayoko Takahashi Layout: Niro Hayata

『BO DIDDLEY BEATS』



P-VINE
PCD-1010

“ボ・ディドリー・ビート”の異名を持つ、あの独特のリズムを徹底的に解析。ジョニー・オーティス、パティ・ホリーなど、そのルーツから、さまざまなジャンルに波及していったバリエーションを一同に紹介している。もちろん、ボ・ディドリー自身の演奏も収録されていて、彼のあの不滅のビートを研究するには絶好の1枚だ。

私はひとつのところに立ち止まらない人間だからな

トレードマークの四角いギターをかき鳴らし、あの独特のリズムで多くのミュージシャンに影響を与えたボ・ディドリー。

先日の来日で、68歳とは思えないアクレシフなステージングを披露してくれた偉大なBOBBYの父。彼の伝説は、今もなお続いているのだ。

●まず、あなたが音楽に興味を持った頃のことから聞かせてください。家族は音楽好きでしたか？

○いや、まわりには音楽をやる人は誰もいなかったね。家族で楽器を触っていたのも私だけだった。今では娘たちがそれぞれドラム、キーボードをやり、息子はシンガーなんだがな(笑)。

●初めてギターを手にした時のことを覚えてますか？

○ああ、1943年…私が13歳くらいの若造の頃さ。姉が、確か28ドルを払って買ってきてくれたんだ。fホールのついたアコースティック・ギターだったよ。そして、まったくの独学で、とりあえず1本の弦を1回ずつ弾いては音が出ることを楽しんでた。そのうち2本の弦を同時に弾きだし、もっと弦があるからと8本全部を使うようになったんだ。ポジションについても、違う弦の違う位置で同じ音が出ることによりやく気がついてな。

●好きだったギタリストはいますか？

○特にはいなかった。ブルースを好きになっていったんだが、そんなに詳しく知っているわけでもなかったしな。ブルースで知っていたのはマディ・ウォーターズ、ジョン・リー・フッカー、ジミー・リード、エルモア・ジェ

イムスだけだった。それにお袋がブルースのような音楽を聴くことを許さなかったんだ。教会音楽はいい音楽、ブルースはいい音楽と決めつけているような人だったからな(笑)。

●ギターに惹かれていったのはどうしてですか？

○ジョン・リー・フッカーの曲を弾きたいと思ったからさ。きっと私にもできると思えたしな。お袋は嫌がっていたがね。“そんな音楽を家で弾くのは許しません”って言われたよ(笑)。

●ボブ・ディドリーの名前の由来にはいくつかの説がありますが、本当のところは？

○13歳の時、友達がいきなり“ボブ・ディドリー”って私を呼んだんだ。まだ中学生の時だ。そのあとボクシングをやり始めて、そのままこの名前を使った。それが今まで続いているというわけさ。だから、私も意味はわかんないよ。また、お袋が子供の時にその名前を耳にしたことがあるそう。南部からやってきて、家々を回る芸人がいたそうでな。ハーモニカを吹きながら踊り、お金をもらうんだが、その人がボブ・ディドリーと呼ばれてたそう。私がボブ・ディドリーと呼ばれるようになってから、お袋にその話を聞いて。お袋は今86歳だから、その芸人は生きていればとくに100歳を越えているだろうが、ボブ・ディドリーの意味は彼が知っているかもしれない(笑)。

●チェス・レコードとの契約以前はどんな活動をしていたんですか？

○たまにクラブで演奏したりもしたが、トラックの運転手が主な仕事だった。他にもボクシングで小銭を稼いだりして。だが、レコードを出したいとは思っていたんだ。それでたまたまチェス・レコードのスタジオが家から2ブロック先にあるって。そこがレコード関連のスタジオだということを知って、家にあった小さなテープ・レコーダーに自分の演奏を録音して直接持って行ったんだ。スタジオの人たちはそれを気に入ってくれた。いったい何なのかはわからなかったようだが(笑)。そして、当時やってたランドル・アヴェニュー・ジャイヴ・キャッツというトリオのバンドを連れて、彼らの前で演奏したんだ。それで契約となったわけさ。

●その頃からブルースに新しいものを持ち込みたいと思っていたんですか？

○うん。…でも、自分で自分が何をやっているのかはさっぱりわからなかった、というのが正直なところさ。それは今でもそうなんだ。“あなたはエレクトリック・ギターのあり方を変えましたね”なんてよく言われるんだが、何をどう変えたのかわからんのだよ(笑)。そう言えば、チェス・レコードに行く前にチェスの向かい側の通りにある別のレコード会社にもテープを持って行ったんだ。そしたらその連中は“これはどんな種類の音楽かね？”と聞いてきた。自分じゃそんなことわからないから“ただプレイしたんだ”と答えただけ。すると“それじゃあ使えない”と言われてしまったんだ。彼らに受け入れてもらえなかったんで、通りを渡ってチェス・レコードの門を叩いた。これがボブ・ディドリーの始まりだったわけさ。チェスは新しいサウンド、新しいリズムを見て取ってくれたんだ。…始めて本格的なレコーディングに連れて行かれた時、スタジオにはチャック・ベリーがいたよ。ちょうど「メイベリン」の録音を終えたところだね。チャック・ベリーの方が先にチェスとの契約をすませていたんだ。私の方は「アイム・ア・マン」を録音したんだが、会社はそれとチャックの「メイベリン」を1枚のレコードに収めたんだ。そして両面大ヒットとなった。私の知る限りじゃ、誰よりも長くチャート・インした。これによってロックン・ロールの創始者と呼ばれるようになったわけだ。…当時、自分ではR&Bと呼んでいたんだが、まあ、R&Bとロックン・ロールは同じものだな。

●音楽性はもちろんのこと、チャック・ベリーはウェスタン・スタイル、あなたはきちんとしたスーツ姿とルックスもまるで違っていましたが、異なるイメージを打ち出そうとしていたんですか？

○ああ、それはあった。だが、いつもいつもスーツだ

たわけではないよ。会場によっていろいろ変えている。例えば昨夜のホール(新宿厚生年金会館)なら、スーツのようなユニホームが似合うだろう。もし、ジーンズ姿で登場したら観客ががっかりしてしまうだろうさ。また、私のような年齢ならタキシードを着てもおかしくないが、もし27歳とかそれぐらい若ければタキシードは無理だろう。そうだな、ボブ・ガンボスが着ているような服の方が好感が持てる。われわれは個性を観客に印象づけなくてはならないし、そのことを忘れてしまったらおしまいなんだよ。私のイメージだったら、それがタキシードという具合になるんだろう。もっとも、クラブのような場所での演奏であれば、ぶっ通しで汗まみれになってプレイするから、もっとラフな格好で行くよ。今着ているような服でな(笑)。

●あなたのあの独特なリズムはアフリカン・ドラムの要素をもとに生まれた、とも言われていますが？

○特にアフリカン・リズムを研究したことはないな。…人は私のやることに何でも名前をつけたがる。リズムに関していろいろな言われるが、さっきも言ったように自分ではどうやっているかわからんのだよ。

●あの四角いギターのアイディアはどうやって生まれたのですか？

○他と違うものが欲しくて、自分でデザインしたんだ。サウンドよりもルックス重視でな。でも、私だけのサウンドが出せるギターになったんだ。最近、みんな同じようなサウンドばかりでうんざりだ。ひとりひとり個性のあるサウンドを出すべきなのにな。それぞれがそのらしい音を見つけることが必要だよ。

●あのギターに付いているたくさんのツミミについて説明してくれますか？

○それはできん。あれはシークレットなんじゃ(笑)。

●昔はギルドなどのギターも使っていましたが、家には他にどんなギターがあるのですか？

○たくさんさ。今、気に入っているのは今日も持ってきたキッズ・ギターだ(写真参照)。これは日本製で、私のために作ってくれたんだ。“Turbo 5 Speed”だぜ、すごい。あと何本かキッズ・ギターを持ってるが、音も作りも大満足してるんだ。他にも、家には自分でデザインしたギターがいくつも転がってる。最近考へて、日本で作ってもらうかと思っているものもあるんだ。キッド・ドラムという名で、ギターにドラム・マシーンを内蔵している。これがあれば、ひとりで演奏するのに便利だろ？ このギターとマイクとアンプを持っていれば、どこでも、いつでも演奏できるわけさ。アンプもひとつのキャビネットにギター用、ドラム用のスピーカーが入ってるものを使うんだ。このアンプも日本のメーカーに製品化してもらえたら、と思ってるよ。…だいたい、いつもこういうことを、どうしたらもっとよい音楽ができるかってことを考へているんだ。ネックなんかにしてもフェンダーなどのモノはデザインは悪くないんだが、壊れやすく耐久製が低い。そこでこのキッズ・ギターのようなネックを考へ出した。これはとても丈夫なんだぜ。メーカーにしてみればその分、みんなが買い替えなくなってしまい、ギターが売れなくなるかもな(笑)。だけど、丈夫なネックという評判がたてば、もっとメーカーにプラスになるだろうよ。

●弦は何を使っていますか？

○ティーン・マークレイのヘヴィ・ゲージさ。これが一番持ちがいいんだ。私はあまり弦を変えないから。張ったら張りっぱなしなんだよ。それでチューニングはいつもオープンEだ。

●アンプは？

○フェンダーのツイン・リバーブを2台使っている。レコーディングではローランドのJC-120もよく使う。ま、そのどちらかがあれば好きなサウンドをたやすく出すことができるよ。

●とても嬉しいことですが、88年にロン・ウッドと一緒に来日して以来、あなたがよく日本でコンサートをやってくれるようになりませんか？

○うん。私も日本に来ることが嬉しいんだよ。みんな素

晴らしい人たちがばかりだしね。これがインタビューだから言ってるんじゃないぞ(笑)。本心でそう思っているんだ。本当はもう少しゆっくりといて、ライブをやりたいんだけどな。家に帰ると家賃の車のローン、食費、医療費、なんという請求書だらけになっているんでね(笑)。日本に来るとお金をいっぱい儲けられることも、嬉しいことのひとつだよ。

●今回一緒にライブをやったボブ・ガンボスについてはどう思いますか？

○彼らは私の息子さ。本当にいい連中、仲間だよ。この前、彼らのために「Get On Up」という曲を書き、スタジオでやってみたんだが、もう最高だったぜ。彼らはきっとビッグになるよ。62年に私が初めてローリング・ストーンズに会い、感じたのと同じものをボブ・ガンボスからも感じるんだ。当時、私はミック・ジャガーに“君たちは世界的に有名になる”って言ったんだ。ミックは“ヘー？”という感じだったが、結果は現在のとおりさ。しかも、ボブ・ガンボスはとてもクリーンだしな。ドラッグをやらないうことは、とても大事なことなんだよ。心からプレイするしね。彼らの音楽に対する姿勢は本物だし、脱帽するよ。今度、彼らを家に呼んでパーベキューをやってやらねば、と思っているんだ(笑)。

●ところで、あなたはよくギターで笑い声、足音、ボールを打つ音などの疑似音を出しますが、ああいったアイディアはどこから得るんですか？

○すべての生活の中からさ。人間は考えることをやめたらそこでおしまいだよ。車輪が泥にはまってしまって、タイヤが空回りして先に進めなくなり、そこであたふたしているのと同じだろ。だけど、私は、ひとつのところに立ち止まれない人間だから。ジャッキで車を持ち上げ、なんとしてでも泥から抜けだしてみせるぜ。…もう63歳になるんだが、どうも私は年齢のわりに若いところがあるみたいなんだ。それがプレイや作曲する時に出てしまう。この年ですら若い人を助けるような曲を書くのか、とよく言われるよ。私と同年輩の人間は、もうレコードを買ったり出かけたりしないだろ。ショーの観客はほとんど若い人で、そのパパママは家にいるというわけさ。だからこそ、新しいもの、古いものをいろいろプレイしてみんなに楽しんでもらえるようにしているんだ。

●今後の予定を聞かせてください。

○ニュー・アルバムの仕上げをやっているところだ。今回ののはどちらかというと短めの曲が多くて、その点では50年代風かもしれない。カントリー&ウェスタンが2曲、スピリチュアルなものが2曲、もしかするとジャズが1曲入るかもしれない。残りは全部ロックン・ロール。こういう組み合わせはあまりないだろ？ 私はいろんな音楽をミックスさせてみたいんだ。そう言えば「In This Country It Should Not Be」という曲でキッズのギターを使ったよ。この曲は、世界中どこでも人々が飢えるようなことがあってはいけないという内容なんだ。皆が一緒になって貧しさをなくするようにするには、話し合いではなく実行する気持ちが必要だ。今まで誰もが金儲けのために、あまりに露骨なアプローチをしてきた。まず、それをなんとかする必要があるだろう。私が若い頃に経験したような貧しさを、君たちのような若い世代には味わせたくないんだよ。国籍、宗教、その他もろもろのことに関係なく、お互いに愛し合い、面倒をみなくては解決できない問題だから。みんな同じ船に乗っているんだよ。そして今、船は沈みかけているんだ。力を合わせなきゃいけないのさ。アメリカではテキサスの大金持ち、ペローが大統領候補になっている。彼は人々のことを考へているような話をしてるが、本当はどうだか。金だけが大事だということが大統領なんて。私が自分で立候補しようか、とさ考へているよ。…おっと、話がだいぶ脱線してしまったな。すまんすまん。

●最後に日本のファンにメッセージをお願いします。

○うーん。キッズ・ギターの宣伝をしてもいいかな？ このギターは見かけも中身も本当に素晴らしい。ぜひとも試してみようことを薦めるよ。それから、私のロックン・ロールを聴いて楽しんでくれるみんなへ、サンキューノ